シーワールドのアニマル達

●カスピカイアザラシ

カスピカイアザラシは、ユーラシア大陸にある汽水（海水と淡水が混りあった水）の湖であるカスピ海のみに棲み、成長しても 1.5m、体重80Kg程にしかならない小型のアザラシで、海にすむワモンアザラシと近縁にあたります。

カスピ海は、日本の面積とほぼ同じ広さもある世界最大の湖ですから、カスピカイアザラシは、この湖の全域に一様に分布しているというわけではなく、季節ごとに回遊し生活しています。春から夏にかけては、冷たい水を求めて水深の深い南部にいくつかの群れに別れて分布し、秋から冬になると氷の張る北部に移動し、氷上で生活するようになります。また出産や子育ても１月～２月にかけて氷の上で行われます。

カスピカイアザラシの飼育例は世界でも少なく日本では当館に平成５年４月29日に搬入された、雄雌各２頭の計４頭が初めての飼育例となりました。実際に見るカスピカイアザラシは、腹側は明るい灰色で、背側の暗い灰色とのコントラストがはっきりしており、また鼻先が長く、親しみのある顔つきをしています。ところが性格は、小さいながらもたいへんに気が強く、近づくとヒゲを立て威嚇してくることもあり、搬入当初の餌付けの際には係員を困らせました。しかし今ではすっかり落ちついて人にも馴れ、その可愛らしい姿をお客様に披露しています。（村松）

▲カスピカイアザラシ *Phoca caspica*

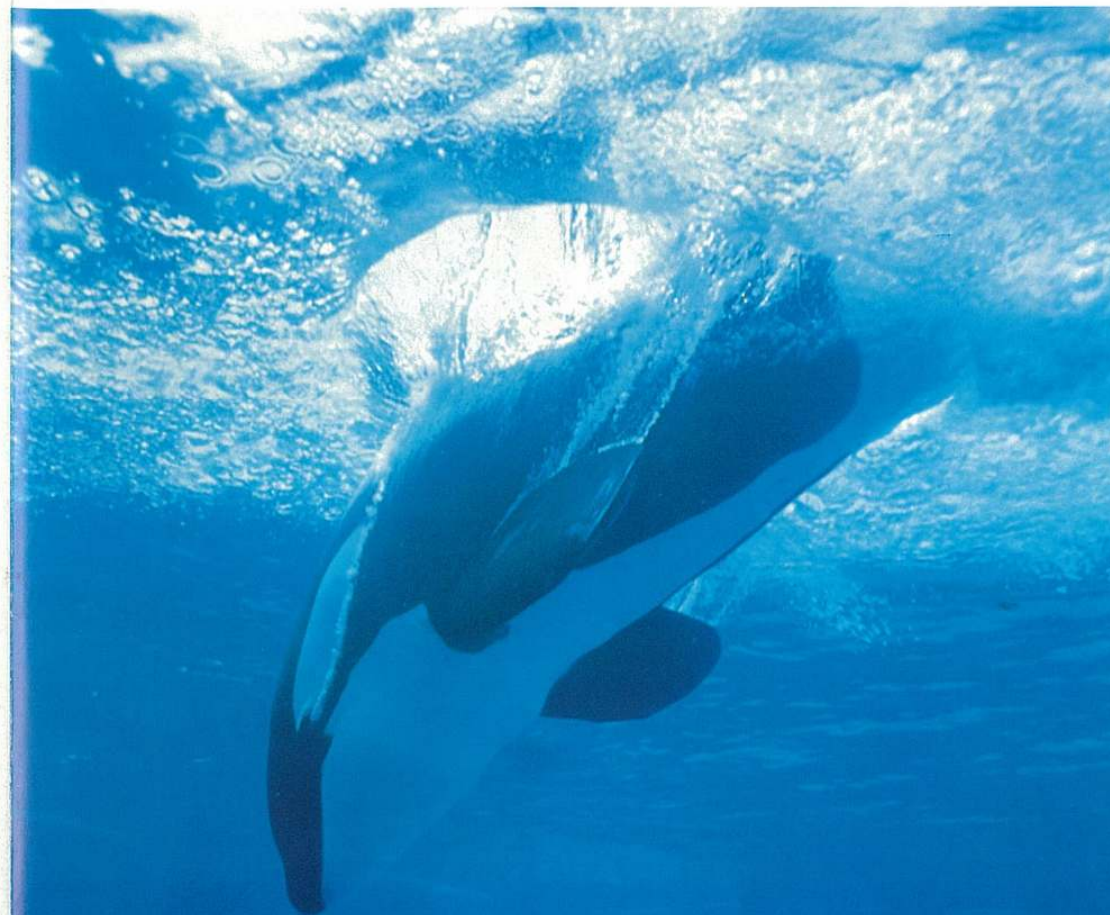
●チョウチョウウオ

チョウチョウウオ科に属する仲間たちは、世界中に約 140 種が知られていて、そのほとんどはインド洋から西太平洋の熱帯および亜熱帯海域に分布し、珊瑚礁を思い浮かばせてくれる魚です。

その中でチョウチョウウオは、本州太平洋側で多く見ることができ、最も北にまで分布域を広げた種類といえます。色や模様が蝶々に似ているところからチョウチョウウオの名がつけられたこの魚は、幼魚の時には眼状紋と呼ばれる黒い目玉のような模様が背びれの後縁にありますが、これは他の魚などからの攻撃から身を守るためのものとも言われています。また大きさは、成長すると全長20cm程になります。

鴨川付近でも夏から秋にかけて、黒潮に乗ってやって来る２～3cmに成長した幼魚を浅瀬で多く観察することができ、当館ではこれらを採集して飼育を行っていますが、採集直後のチョウチョウウオは病気になりやすく、また水槽の中ではプランクトンなど限られた餌しか食べてくれないので大変に苦労します。

チョウチョウウオは、海産の観賞魚として飼育の歴史も古く、よく知られている魚ですが、その産卵習性や生活史はほとんどわかっていません。水族館で、ぜひ繁殖させたい魚種のひとつでもあります。（加藤）

▲チョウチョウウオ *Chaetodon auripes*

さかまた No.42　（禁無断転載）

編集・発行　鴨川シーワールド

〒296 千葉県鴨川市東町1464－18
☎(04709)２－２１２１

発行日　平成５年12月

さかまた

鴨川シーワールド　NO. 42

シャチとトレーナー

▲シャチショーのメイン種目「スカイロケット」

連日ダイナミックなシャチのショーが繰りひろげられているオーシャンスタジアム。シーワールドの看板とも言えるシャチショーは多くの皆さんから好評を博し、当館を訪れる大きな目的の一つとなっています。野生動物とのふれあいがテーマとなっているシャチショーで動物とトレーナーが見せてくれる息の合った友達同士のような演技は日頃培われた信頼関係があって初めて成し得るのです。そこで今回はトレーナーの仕事を通し、シャチとのつき合い方をご紹介しましょう。

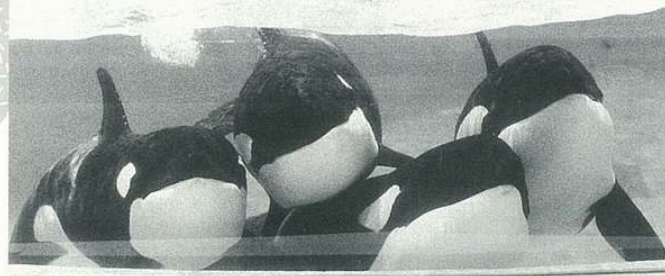
早朝のスタンド

早朝、人影のないスタンドからは動物達だけの世界を見ることができます。そこでトレーナーは遠くから気付かれないようにシャチの様子を観察します。彼らの自然な行動を知ることは、健康状態や動物同士の仲間関係を知る上で大切なことであるばかりでなく、観察を続けることで、わずかな変化にも気付くようになるとともに観察力も身に付き、病気の早期発見や早期治療にもむすびつくのです。

シャチの体温

シャチの体温は、イルカやアシカと同様にデジタル式の体温計で直腸温を測ります。測定中はシャチにおなかを上にして水面で静止してもらわなければなりませんが、これは訓練により、比較的簡単におぼえてくれます。このような姿勢をおぼえてくれると、お母さんが子どものおでこに手を当てて熱の有無をたしかめる時のように簡単に測ることができるので、今では1日3回の体温測定を行っています。

▲体温測定の時間です。ハイお腹を出してー。

ちなみにシャチの平熱は35.5℃から36.0℃のあいだですから、36.5℃といわれる私達ヒトの平熱からみると若干低い値になっています。

▲好奇心のかたまり

▲愛情と信頼のワンシーン

水の中でのふれあい

鼻先でトレーナーを押したまま水中から飛び出すダイナミックなスカイロケットをはじめ、ショー中トレーナーは幾度となくプールに飛び込み、様々な演技を水の中で行います。シャチの生活する水の中へトレーナーが入っていくことは、つきあいの中での最初のふれあいの時であり、シャチが自らふれあいを求めてくる大切な機会でもあるのです。しかし、訓練初期から何の心配もなく水中でシャチと遊んだり、芸を教えたりできるわけではありません。シャチは水中の珍しい物を目で見るだけでなく、今まで見たこともない細長い胸ビレ（ヒトの手）と2本の尾ビレ（ヒトの足）を持った人間の姿に興味をしめし、水の中に入ったトレーナーに少し口を開け、するどい歯を見せながら近づいてくることもあります。おそわれることは決してありませんが、十分な注意が必要と同時にチョッピリ恐怖心もうまれてきます。ヒトの手足に慣れてしまえばシャチは人に対しての興味はうすれ、いよいよ訓練のはじまりです。訓練は動物の最大の力を引き出すことが目的ですが、水中では少し話が違ってきます。ほんの少し尾ビレに力を入れて泳いだだけでもかなりのスピードがでるので、そのスピードについていけず、あわれトレーナーは波にもまれ、シャチともつれあいプールの水を何度も飲んでしまうこともあります。しかし、このようなことを数回くりかえしているうちに、シャチは、水中では貧弱で無力な人間に合わせるかの様に力を調節しはじめます。それは単に尾ビレのあおりだけを小さくするといったものではなく、体の各部の動きをおさえ、私達の動きで無理なくついていけるようなスピードに調整してくるのです。水中で接しながら彼らの知性と友好的行動を感じるこの瞬間は、互いにわかり合えてきた喜びを感じる時でもあります。

シャチとのつきあい

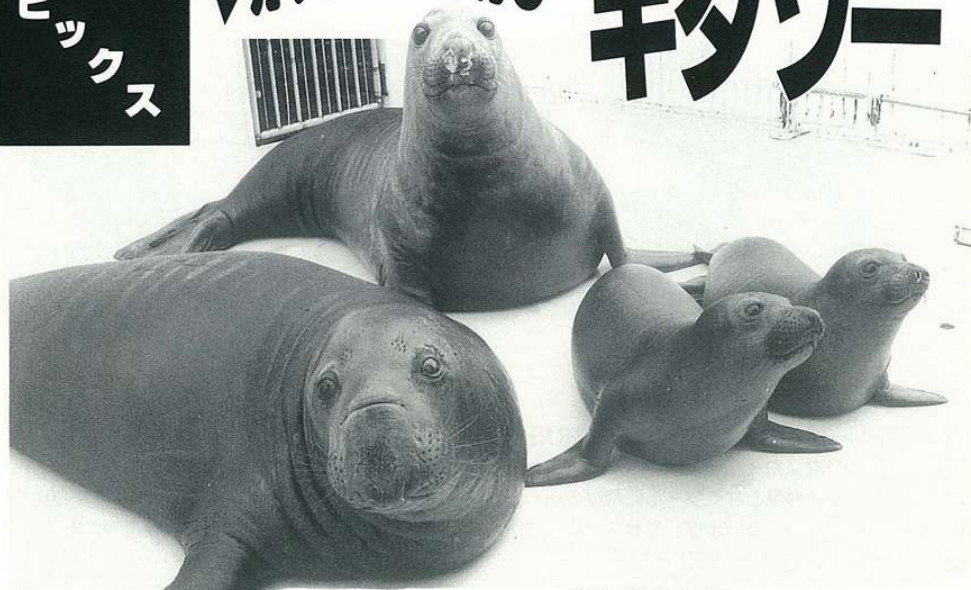
生き物相手の毎日は決して同じ日の繰り返しではなく、1日1日に違った笑いや苦労があります。そうした日々を過しながらトレーナーはシャチを知り、シャチにもトレーナーを知ってもらい互いに信頼関係を築いていきます。

この秋、4頭のシャチの中で最古参の「ビンゴ」は、シーワールドにやって来て9年目を迎えました。長いつきあいの中にはたくさんの思い出があります。一時期同居していたオキゴンドウに、連日追いかけ回されていた弱虫のビンゴも今では体長5.8m、体重2,300kgにまで成長し、大きな背ビレからは成熟した雄のシャチの特徴をうかがうことができます。これからも4頭のシャチ達はたくさんの思い出を作ってくれることと思います。そんなつきあいの中で彼らとの信頼関係をより深め、その姿を多くの皆さんに見てもらいたいと願っています。

（勝俣浩）

▲口の中はきれいですか？

トピックス

▶カリフォルニアから キタゾー

▲「おおきいなあ」「ちいさいなあ」

7月15日、アメリカから雄雌２頭のキタゾウアザラシが仲間入りしました。キタゾウアザラシはアメリカ西海岸のみに棲み、一時その数が激減したことから、アメリカ政府により手厚く保護されている動物です。今回の搬入は前回('84年）と同様に姉妹水族館であるシーワールド・オブ・カリフォルニアとの動物交換としてアメリカ政府の許可を得て実現したものです。

当館のスタッフ２名と、飼育担当のグレッグ・グルーラー氏の３名に付き添われた２頭は、27時間の飛行機輸送の末、無事当館に到着しましたが、輸送用のおりの中では、見知らぬ風景にキタゾウアザラシたちは特徴のある大きな瞳をキョロキョロさせていました。到着直後の測定では、雄が体長1.5m、体重92kg、雌が体長1.3m、体重75kgで年令は推定５ヵ月と思われます。最初はオドオドしていた２頭も、今では先輩格のラブやジャブと仲良く一緒のプールで生活するまでに落ち着きを見せ、給餌の時間になると待ち切れないといったように扉の前で係員からの餌を待っていて、旺盛な食欲を見せてくれています。日本では当館でしか飼育されていないこの貴重な動物を大切に育てていきたいと思います。（中野）

▲成田空港へ到着

▲グルーラー氏からエサをもらう

特別展示「水族館の水」開催中

▲このボタンと、このボタンを押して…動くかな!?

水の中にすむ生物にとって「水」は生活の場であり、飼育での重要なポイントのひとつです。ひごろ生物たちにとって、よりよい水を求めてきた水族館では、これまでに様々な工夫をし、常によい水を作ろうと努力してきました。今回の特別展では、その「水族館の水」について紹介することとしました。

ひとことに「水」といってもいろいろですが、水族館では何よりもまず生物に適した水であることが大切です。シーワールドでは目の前の太平洋の海水と、房総の山々から湧き出る井戸水を利用していますが、大自然の水を使えば安心というわけではありません。水が手に入ったところで、皆さんはどんな方法で飼育に使いますか。せっかく手に入れた水を、なんとか長く使う方法はないものでしょうか。今回の特別展ではそんな疑問にクイズやパズルでお答えします。ただただ水の話ばかりではおもしろくないという皆さんには魚の飼育にすぐに役立つ パズル「ＳＯＳ金魚を救え！」はいかがでしょう。魚の様子から水のどこが悪いのかを判断し、苦しむ金魚をあなたの手で救って下さい。これができれば免許皆伝！水族館の飼育係となることをおすすめします。

みなさんの飼っている金魚はお元気ですか。もし気になったらぜひこの特別展で、見て、触れて考えて、シーワールド流飼育法（水編）を身につけて帰っていただきたいものです。（関）

▲君は金魚を救えるか？

▲水の使い方のモデル水槽

●「エイにさわろう！」

今年も7月21日よりピノキオハウスにおいて「磯の生物タッチング水槽」を開設しました。今回は、磯の生物の他に新しい試みとしてエイを展示しました。エイは、皆さんにもおなじみの魚で、尾ビレに毒をもっていることでもよく知られていますが、タッチング水槽内のエイは、毒針を取り除き安心して触ることができるようにしてあります。参加している人達は初めは警戒しているようですが、恐る恐るエイに触れ、思わず歓声をあげたり給餌コーナーで直接手より餌を与えるうちに、知らず知らずのうちに親しみが増してきているようです。例年ですと、夏休み期間中だけの「タッチング水槽」ですが、「エイ・タッチング」の評判が良いので春まで続けることとなりました。ご来園の折には、ぜひチャレンジしてみて下さい。

（満冨）

●カリフォルニアアシカ3頭出産

梅雨入りの声がちらほらとささやかれ始める頃当館ではカリフォルニアアシカの出産が始まります。今年もまた３頭のアシカが出産しました。

6月9日にセラ（6才）、6月26日にジュニー（9才）、7月2日にケープ（20才）がそれぞれ一頭づつ出産したものです。

今回7度目の出産となるケープはさすがに落ち着いていましたが、初めての出産のジェニーとセラはなかなか授乳が出来ず、係員をヤキモキさせるひと幕もありました。また、セラは、ケープが6年前に出産した仔であり、母と娘が同時期の出産という当館で初めてのケースとなりました。最近ではジェニー、セラにも母親の貫禄がみられるようになり、一方で日一日と成長していく仔どもたちの様子は、これまで何回となく見ていても、毎回係員に新たな感動を呼び起こしてくれます。

（金子）

●動物Q＆A

春と秋を中心に、多くの学校の皆様に校外学習の場として当館をご利用いただいていますが、これまで以上に海の動物達を知ってもらうため、この春より幼稚園から高校まで段階に分けた専用のプログラムを実施しています。そのうちのひとつ「動物Q＆A」は、鯨の体の仕組みや能力を簡単に紹介し、動物に関する質問に係員がお答えするものです。「イルカは眠りますか？」「シャチはどうして海の王者といわれるのですか？」など様々な質問があり、海の動物に関する知識を深め、また身近に感じていただくことに一役かっています。

このほかに、学年に合わせて、スタンプラリーノートや探検ノートをお配りして、楽しく学び、より思い出深いひとときを過ごして頂けるようにも努めています。

（法花）

●入園者2,000万人を達成

去る8月7日、当館が昭和45年に開園して以来、通算で2000万人目のお客様をお迎えし記念セレモニーが行われました。

2000万人目となったお客様は埼玉県川越市にお住まいのＯＬ宇都木さん（26才）で、多くのお客様が見守る中、鳥羽山総支配人から感謝状やシャチのモニュメントなどの記念品が贈られた他、鴨川シーワールドホテルの宿泊券などの豪華賞品がプレゼントされ、一緒に来園した友達と思わぬ幸運に喜びを分かち合っていました。

また、当日は2000万人目の入園を記念し、入園した子ども達全員にオリジナルキャラクターグッズがプレゼントされました。

この23年間の多くの方々のご愛顧に心より感謝致します。（前田）